『比較民俗研究』27. 2012／6

研究ノート

柳田國男の「主体性」の学問（2）
－比較民俗研究の新しい地平を開くために－

フレデリック・ルシーニュ※

この研究ノートの趣旨は柳田国男の思想と民俗学を理論的に分析して、世界の人文科学のなかに位置づけるための、現在取り組んでいる科学認識論的研究の概要を紹介するものである。理論的分析の中心的な問題提起は柳田民俗学における「主体」の扱い方である。この分析を行うために、民俗調査の事例研究を採用せずに、主に柳田国男の人生の歴史的な出来事と、柳田が知識人・民俗学者として残した文献を解説することに当たる。この研究課題は柳田の思想や民俗学を「主体」という問題提起を軸に分析することによって、日本や海外の他の民俗学者・人文科学者のそれと比較することの可能性をより有意義にするという目標が先ずあり、その目標に向かって普遍的な論理の基盤を築いていく考察を試みるものである。

現在検討している柳田民俗学の三つの主な特徴を述べておこう。

1／柳田国男は一般的な意味での知識の問題をグロバールな視点で捉えていた。大航海時代からはじまり19世紀に加速した欧米諸国が行った世界のグローバル化に伴って、欧米諸国の価値観を中心に世界の知識が再編された。日本において「文明開化」という思想が明治維新の紛争のあげく新しい政府の国是の方針に据えられたのも、明治時代の欧米文化の優位を物語っているが、近代日本の知識人として柳田はこの文化的支配を一種の知識的な支配として把握していた。言い換えると、日本文化のみならず世界の様々な文化の理解において欧米諸国の認識方法（知識とそれを認識する方法論）と、日本あるいは欧米諸国以外の認識方法との間に競争関係に置かれていることを彼は強く感じており、欧米諸国以外の国々の文化が破壊されることを危惧した。すでに先行研究で指摘された柳田国男の危機感は欧米文化の優位性が潜在的に引き起こしてしまう文化多様性の破壊の問題に根付いている。今の言葉で言うと、柳田はグロバール化が伴う文化多様性・多文化共存の喪失という現象を先立って認めたといえるし、ネーティブ文化の活性化の必要性を問題にしたのである。

日本のみならず世界の「近代化」の過程において欧米文化の優位性が引き起こす一種の知識的な支配を危惧した柳田にとっては、その現象をただ観念的なものとして捉えず、実践的な問題として理解していた。なぜならば、ネーティブ文化が破壊されるか、または逆に活性化できるか、という実践的な課題に直接に関わっているからである。柳田の人生を通して、今のべた危機感とその実践的な解決方法の追求を彼の様々な活動の中に認めることができる。

※神奈川大学歴史民俗資料学研究科博士課程

理論的なレベルでこれを分析すれば、普遍性という問題が柳田の思想と民俗学に深く関係している。彼のアプローチを特徴づけるのは相対主義と個別主義の思考方法だとよくいわれている。グロバール化の過程の中で、普遍主義的な言説として日本に現れてきた欧米諸国の知識的支配に対して、柳田は文化の相対性を強調して、個別研究の具体的な作業を計画し、また彼が言う「直売り」的な海外の議論に対して徹底的な帰納法の確立に取りかかった。『遠野物語』から一生にかけて、普遍性の問題が彼を刺激したのである。日本の相対主義的・個別主義的なフォルクロー・スタディーを目指したのはその先にもっとグロバールな「世界民俗学」の登場という願望があったからであり、容易な相対主義・個別主義に甘えていたからではない、という事実はよく先行研究によって検討されており、柳田民俗学が普遍的・グロバールな側面をもっていたことがすでに定説となっている。

したがって、柳田の思想と、彼が指導した日本民俗学の確立を検討するにあたって、普遍性の問題の理論的な分析のために大幅な部分を費やすことが必要である。

2／以上の知識的支配と普遍性の問題と関連して柳田国男の思想と民俗学を検討すれば、柳田民俗学のキーワドとなっている「反省」と「自己省察」という概念に重視しなければならない。「反省」と「自己省察」のみならず「史心」なども柳田独特な用語の根底には思考の自立の必要性という意味合いが含まれている。要するに柳田が讃えた「反省」と「自己省察」などは人間の自立に繋がる実践的な文化の研究方法であった。この点は柳田国男研究のなかですでに大いに議論されており、とりわけ柳田の教育論を検討した研究者によって、柳田民俗学のキーワドとしての「反省」・「自己省察」と柳田が目指した日本人の自立性との関係が指摘されてきた。

日本人のみならず、上述したように柳田の立場は普遍的だったので、柳田民俗学における自立性の問題は哲学的・倫理的な次元で検討する価値がある。柳田の思想や学問を検討するにあたって、それをまず倫理的な業績として継承していこうという論者が少なくないのだが（鳥越皓之、川田稔、藤井隆至など）、ただ厄介なことに、柳田のナショナリズムやロマン主義的な精神がその倫理観を形づけているため、過剰に柳田の業績を美化することをさけて、その論理観を冷静に検討することに努めたい。柳田の政治性や偏見を批判してきた他の先行研究（福田アジオ、橋川俊忠など）にならって、先祖・天皇・女性など、政治とジェンダーにかかわるイデオロギー性を無視せずに正確に分析していきたい。

3／自立性といえば、自ずと「主体」の問題にたどりつく。柳田人身が「主体」という言葉を使用しなかったようであるが、早くも1970年代・1980年代に後藤総一郎や神島二郎のような先駆的な柳田研究の論者が「主体」という用語を政治的な意味合いを込めて採用していた。21世紀に入ってから、鳥越皓之、佐藤健二、永池健二や佐藤光など、文化の伝承者として柳田民俗学によって重視された「常民」の「主体性」に注目した研究者が多くなってきた観がある。後者は、ミシェル・フーコーなどのフランスの科学

認識論の影響を受けたり、あるいは、戦後日本のマルクス主義系の思想家が愛用した「主体」の言葉を今度はプチナショナリズムの保守的な思想のなかに取り入れたりして、様々な視点や方法で論じられてきたが、共通的には文化伝承者としての主体の自立性を課題にしている。

柳田民俗学における「主体」とは何か。この質問に答えることも簡単ではない。なぜならば、柳田は個人を共同体の一員として考えるために、彼のアプローチは全体的（ホリスティック）に人間を社会環境や自然環境のなかに位置づけて、それらの関係性を重視する傾向があるからである。したがって、彼の観点では、人間が自立的に自分の文化を再認識するための鍵は共同体（村社会・国民）や自然環境のなかに「自己省察」して、「民間伝承」というデータを収集し比較することによって、口で伝えられてきた共同体の歴史を再構成するというプロセスである。

「自己省察」としての柳田民俗学がどのようなアプローチをもって人間の自立に目指していたかを考察するために、科学認識論（エピステモロジ）の視点で「主体」にかかわる諸問題を検討することを試みたい。科学認識論の視点で柳田民俗学における「主体」の位置と機能を分析することで、普遍性の理論的な難しい問題を分かりやすく解体できると思われる。さらに、この試みは観念的な「柳田国男論」にとどまらず、柳田の思想に沿って実践的な人文科学の発展につながる研究成果を提示できるはずである。

最後に、認識論的な分析方法を紹介するために、柳田国男の読者に対する書き方・語り方をまとめておきたい。

柳田国男が想定した読者は数の限られた学者よりも一般の人々であった。読者を日本の将来を担うアクターと見なしていた柳田の民俗学は個人個人の自文化の再認識を呼びかける、一種の運動論であり認識論でもあったと理解していい。アクターとしての読者＝国民の、自文化への認識が「反省」によって高まっていくこと、日本国民の中にその意識が高揚していくことが柳田民俗学の目的であった。主体的に自文化を再認識するべく読者たちが、柳田国男の脳裏のどこかに常に配慮されており、読者＝国民の認識が柳田国男のターゲットであった。この読者＝国民＝住民の主体的な意識と行動を促そうとする精神を、「住民主体」の精神という分かりやすい表現で捉えることができようが、科学認識論の用語を借用するならば、柳田国男はたくみに「観察主体」と「認識主体」の関係を再構築していたといえる。したがって、柳田の思想と学問における住民の主体的な意識と行動を促そうとする精神、つまり柳田が「観察主体」と「認識主体」の特殊な関連付けから再生させようとした実践的な学問の諸側面を検討しなければならないと考えている。

参考文献

橘川俊忠　「柳田国男におけるナショナリズムの問題」『神奈川法学』19巻-1号、1983年

佐藤健二　『読書空間の近代：方法としての柳田国男』弘文堂、1987年

佐藤光　『柳田国男の政治経済学：日本保守

主義の源流を求めて』世界思想社、2004年
鳥越皓之　『柳田民俗学のフィロソフィー』東京大学出版会、2002年
永池健二　「〈日本〉という命題―柳田国男・「一国民俗学」の射程」『柳田国男・主題としての「日本」』柳田国男研究会6、梟社、2009年
福田アジオ　『柳田国男の民俗学』吉川弘文館、1992年

新刊紹介

鈴木正崇著
『ミャオ族の歴史と文化の動態
－中国南部山地民の想像力の変容－』

日本文化の原郷が中国雲貴高原に居住する少数民族の民俗文化に認められると、我が国の民俗文化の要素との比較対照が盛んに行われた時期があった。このような通時的志向とは趣をかえ、20年余にわたり同時代に生きるミャオ族の人々の生活を現地調査で直視し、その意味を現在学的視点から分析してきた著者の、フィールドワークとデスクワークの見事な集成が示された。

本書は、序文でミャオ族の現状を概説し、第一章：ミャオ族の神話と現代－貴州省黔東南を中心に　第二章：祖先祭祀の変容－貴州省黔東南雷山県烏流城寨の鼓社節　第三章：死者と生者－貴州省黔南三都水族自治県小脳村の鼓社節　第四章：ミャオ族の来訪神－広西壮族自治区融水苗族自治県の春節　第五章：ミャオ族の巫女さんたち－湖南省麻陽苗族自治県の場合　第六章：龍船節についての一考察－貴州省黔東南台江県施洞鎮　第七章：銅鼓の儀礼と世界観についての一考察－広西壮族自治区南丹県　第八章：貴州省の観光化と公共性－ミャオ族の民族衣装を中心として　おわりに　の構成をとり、巻末には、詳細な文献一覧と索引を付し、読者の参考を促す親切な本作りをしている。

鈴木は序文で、「文化とは何かを問うよりは、現実に起こっている意味作用、表象、言説、実践の実態から、文化の概念がどのように構築され、活用されるかを考えるべきなのであろう。そのすべてにかかわるのが想像力である」と基調となる考え方の大枠を示し、精細なフィールド資料を読者に提示し、その上で自身の分析を披露するという手続きを踏むことにより、資料に対する公平性と論理に対する批判を担保している。記述と分析のバランスがこのように保証されているので、読者は自身の異論も展開することができる。本書の構成と体裁には、このような配慮があり、また、第八章は観光化と学問の関係を丁寧に扱っており、人類学、民俗学の応用・実践論としても読み取れる。文化資源の安易な利・活用が垣間みられる今日、この方面に大きな示唆を与えてくれる。中国少数民族研究の新たな動向として国内外で注目されるべき一書といえる。　（佐野賢治）

A5判　558頁　風響社　8000円　2012年4月刊